

西尾実と道元 (VI)

杉 哲

Nishio Minoru and Dohgen (VI)

SUGI Satoru

(Received October 1, 2009)

1. 問題の所在

東京帝国大学文科大学における村上专精の講義の聴講は、調査の結果、西尾実の場合、大正元(1912)年度と大正2年度であり、2年連続しての受講であることが判明した⁽¹⁾。通説の更新である。

大正元年度の聴講について興味深い事実がある。「日本／仏教史／村上講師／(一)／西尾」(引用者注一「／」は改行を示す。以下同じ。)という表題をもつ西尾実の聴講ノートに関わる。本ノートの見開き12頁、それも右側の頁に「(1912-10-11)」という書きこみがある。これは「1912(大正元)年10月11日」と読むことができる。日付が見開き12頁にあるということは、また、当日以前の分が見開き11頁分あることを示している。

では、見開き11頁分はどうなっていたか。見開き11頁分の内訳についてみてみよう。最初の7頁分は白紙であり、空白のままである。空白の7頁の後に、見開き4頁分の記載がある。ノートの記載状況から見て、講義1回分位の分量であろう。聴講の日時は「1912(大正元)年10月11日」以前ということになる。ノートは、調べ得た限り、後から書かれたものではなかった。講義中に書きとめた跡が歴然とわかる書き方になっていた。とすると、西尾実は「1912(大正元)年10月11日」以前という、極めて早い時期から、村上专精の講義を聴講していたことになる。今、「極めて早い」ということばを用いた。というのも、西尾実が大学入学時のことを回想して、つぎのように述べていたからである⁽²⁾。

(引用者注一大正元年)10月3日までにという入学手続きをкаろうじてすませました。その日から時間割を調べて、聴講や演習出席の予定を立てましたけれども、学年は9月なかばからはじまっていたはずですから、中には、1回もしくは2回欠席になった学科もありました。

西尾実は「(引用者注一大正元年)10月3日まで」に

大学入学の手続きをすませて、「その日」から「聴講や演習出席の予定を立てました」という。繰り返すことになるが、「その日」とは、大正元(1912)年10月3日のことである。ということは、「1912(大正元)年10月11日」以前に、西尾実が村上专精の講義を聴講することは可能であった。西尾実の証言は、村上专精の講義の聴講時期とも符合する。村上专精の講義の聴講は、入学時の段階で決まっていたのではないか。そうと考えると、通説とは異なる光景が浮かび上がってくる。

西尾実の「年譜」研究において、最も信頼度の高い著作は西尾光一「西尾実年譜」(『西尾実国語教育全集』第10巻)である。「西尾実年譜」が、通説をなしている。「西尾実年譜」にて、大学入学前後の記述を確かめておこう⁽³⁾。

明治四十五(大正元)年(一九一二)

二十四歳(数え年—引用者注)

四月、大下条尋常高等小学校に転任し、高等科一・二年を担当する。(略—引用者、以下同じ)六月、農事休暇を利用して上京し、東京帝国大学文科大学文学科選科(国文学専攻)に入学のための願書を提出した。九月十三日、明治天皇大葬の当日、入学試験が行われた。文科大学選科の受験者八十名中、合格者は十一名で、国文学専攻は、同じ長野師範の四年先輩で、その年東京高等師範学校を出た坂井衡平、後に国語学者となった湯沢幸吉郎との三名であった。九月三十日付で大下条尋常高等小学校を退職、上京して、再び学生生活に入った。(略)十月、長野県知事千葉貞幹名の「服務義務免除ノ件聞届ク」旨の通達があった。芳賀矢一・藤村作・垣内松三などの講義を聴講したが、中途退学しようとして、長野師範学校時代の恩師で、当時、県学務課主席視学をしていた守屋喜七にたしなめられて、思いとどまった。

大正二年(一九一三)

二十五歳

東大での聴講範囲を、国語学・国文学から、哲

学・心理学・美学・宗教学などにひろめ、中でも姉崎正治「中世のキリスト教」・村上专精「日本禅宗史」などから得る所が多かった。(略)

「西尾実年譜」では、このように、大学入学一年目の聴講科目は「芳賀矢一・藤村作・垣内松三などの講義を聴講した」となっている。ここに、村上专精の名前は、村上专精の名前は、「中途退学」事件後の「大正2年」の項に初めて登場している。登場の仕方は、「東大での聴講範囲を、国語学・国文学から、哲学・心理学・美学・宗教学などにひろめ、中でも姉崎正治『中世のキリスト教』・村上专精『日本禅宗史』などから得る所が多かった。」というものであった。「中途退学」事件後の聴講科目の中で、「得る所が多かった」講義として村上专精とともに、姉崎正治の名前が挙がっている。しかし、姉崎正治の講義「中世のキリスト教」も、また、大正2年度という通説とは異なり、実際は大正元(1912)年度の聴講であった⁽⁴⁾。

大学入学時の聴講科目について、通説の中に新知見を置いてみると、村上专精と姉崎正治の名前が突出していることに気がつく。西尾実が大学入学当初より、何にもまして、村上专精と姉崎正治の二人の講義を聴講する強い意志があったのではないか。大正元(1912)年の西尾実にとって、二人の占める位置は高く輝いていたのではないか。ではなぜ、二人が、通説の生成の中で、叙述の後景へと退いていったのだろうか。

この謎を解くのが、次なる課題である。そのための基礎作業の一つとして、「年譜」事実について再確認する必要がある。というのも、上に掲げたように、通説とされてきた「年譜」事実の誤りが認められたからである。調べ得た範囲では、先行研究はなく、まだ研究の手が届いていない。「年譜」事実の誤りは、記録性の問題に止まらない。意識や認識に関わる問題である。それだけに、「年譜」の事実認定には慎重でありたい。

「年譜」事実の確認作業として、ここでは、大正元年度受講科目の実際及び「中途退学」との関係という二つの問題とを取りあげ、それぞれの内実の解明を目指したい。

2. 「年譜」の検証 (I)

「西尾実年譜」には、大学入学一年目の聴講科目については「芳賀矢一・藤村作・垣内松三などの講義を聴講した」とあるのみで、これ以上の言及はなかった。「芳賀矢一・藤村作・垣内松三など」の「など」のように、西尾実が聴講した講義について、担当者全員の

氏名も挙がっていない。また、「芳賀矢一・藤村作・垣内松三」と名前はあるものの、各自が担当した講義題目名は記されていない。

実際は、どうだったのだろうか。大学入学一年目(大正元年度)の聴講科目について確かめておこう。まずは、西尾実自身の主張に耳を傾けてみよう。西尾実が、著書『教室の人となって』の中で、大学入学前後の事情について、つぎのように回顧している⁽⁵⁾。

そのころは、大学の学年も九月を新学年としていましたが、私は選科生として入学試験など受けていましたから、入学手続きは十月三日になってしまいました。急いで時間配当表を調べて、第一学年度の講義や演習の時間割を作成しました。知人といえば、東京高師国漢科出身の坂井衡平君ひとり、ほかに相談相手もありませんから、聴講科目は国語・国文・国史のような専攻科目をえらび、各学年5単位以上、三学年を通じて十九単位修了すべきことになっていましたので、このときはたしか六単位と定め、ほかに、八杉講師の「十九世紀のロシア」という講義を聴講しました。(略)専攻を志して入学した国文学関係では、芳賀矢一先生の「文学概論」と「平安朝文学史」を聞き、藤村作先生の「元禄期の文学」と「読本の研究」などの単位を取りました。

西尾実が、大学入学の年(大正元年度)の受講科目について、このように回顧していた。まとめると、つぎのようになろう。

- ・聴講科目は、「講義」と「演習」からなっていた。
 - ・「聴講科目は国語・国文・国史のような専攻科目」を選んだ。
 - ・単位数は、「各学年5単位以上、三学年を通じて十九単位修了すべきことになってい」た。
 - ・単位数は、「たしか六単位と定め、ほかに、八杉講師の『十九世紀のロシア』という講義を聴講し」た。
 - ・「専攻を志して入学した国文学関係では」、芳賀矢一の「文学概論」「平安朝文学史」、藤村作の「元禄期の文学」と「読本の研究」などの講義を履修した。
- 西尾実が回顧するところによれば、大学入学の年、大正元(1912)年度の受講科目は「六単位と定め」たという。「六単位と定め」のように、一年次の履修単位数は明瞭に記憶されている。反面、「六単位」に対応する講義科目名は、定かにされていない。一年次の履修科目の内訳は、実際、どうなっていたのであろうか。

ここに、東京帝国大学文科大学発行による『文科大学学生便覧』と題する文献資料がある。当該年度の教務や職員等の情報を伝える資料の一つが、学生便覧である。学生便覧は、毎年度更新の上、刊行される性格

をもつ。この時期、東京帝国大学文科大学では、毎年度、『文科大学学生便覧』（以下、『学生便覧』と略称する一引用者注）が刊行されていた。そして、この『学生便覧』には、「講義題目」の章があり、文科大学所属の哲学科・史学科・文学科、計3学科の当該年度の「講義題目」が、授業者名や単位数とともに記載されている。

大正元年度版『学生便覧』の「講義題目」の章を見よう。そこでは、「単位数」は大方が「1単位」（通年）であるが、例外的に「半単位」という記載もある。「半単位」とは、どういうことか。「半単位」には、該当する「講義題目」の「備考」欄に注意書きがつけられている。例えば、こうである。「2ヶ年」の履修で「1単位」となる、あるいはまた、ほかの講義と「合わせて1単位」とする旨の文が附されている。このように、開講単位は、原則、「1単位」であった。「1単位」は、一つの講義科目に対応している。「六単位と定め」たとは、従って、六つの講義科目を選択したことを意味しよう。「ほかに、八杉講師の『十九世紀のロシア』という講義を聴講しました」とあることにより、西尾実の証言に従うと、大正元年度は、合計7科目の講義を聴講したことになる。

西尾実の回想には、先に示したように、5科目の講義題目名が挙がっていた。「八杉講師の『十九世紀のロシア』」、「芳賀矢一先生の『文学概論』『平安朝文学史』」、「藤村作先生の『元禄期の文学』と『読本の研究』」の5科目である。では、残りの2科目は何と何だったのだろうか。

ここで、今一度確認しておきたい。西尾実の証言は、回想という記憶の中の出来事であると、西尾実が想起する5科目の講義題目に、記憶違いはないのだろうか。先に進む前に、5科目の講義題目の真偽と開講年度を確かめる必要があろう。西尾実のいう5科目の担当者名と講義題目名は、つぎのようであった。

芳賀矢一「文学概論」
 芳賀矢一「平安朝文学史」
 藤村 作「元禄期の文学」
 藤村 作「読本の研究」
 八杉講師「十九世紀のロシア」

この5科目について、『学生便覧』と照合してみよう。芳賀、藤村、八杉の三氏は、大正元（1912）年度版『学生便覧』には、どのように記載されているだろうか。三氏について、当該年度の職名と所属先及び開講科目名と単位数を掲げる。

芳賀矢一教授（文学科国文学）
 文学概論 1単位
 国文学史（上古及中古） 1単位
 平安文学ノ演習（藤村助教授ノ演習ト併セテ1

単位）

藤村 作助教授（文学科国文学）
 近世小説史（読本ノ歴史） 1単位
 近世国文学雑論 1単位
 徳川文学演習（芳賀教授ノ平安文学演習ト併セテ1単位）
 八杉貞利講師（文学科言語学）
 露西亜語学初歩 1単位
 露語文学書購読 1単位

西尾実が想起する五つの講義題目と『学生便覧』の記載とを比べてみよう。芳賀矢一の場合から始める。「文学概論」の名は両方にある。実際も、そうだったのであろうか。根拠が必要であろう。ここに、講義当時の聴講ノートがある。聴講ノートは、同時代資料である。十分根拠になりうる資料であろう。

西尾実には、長野県下伊那教育会館内に設置された『西尾文庫』に、東京帝国大学文科大学在学中の聴講ノート合計70冊が遺されている。70冊の中に、「文学概論／芳賀教授／西尾」、「文学概論／芳賀教授」という表題をもつノートが各1冊、合計2冊ある。ノート「文学概論／芳賀教授／西尾」とノート「文学概論／芳賀教授」、両者の関係はというと、このようである。内容上、ノート「文学概論／芳賀教授／西尾」の続きが、ノート「文学概論／芳賀教授」になっている。2冊1組で「文学概論」の講義をカバーする関係にあった。

では、ノート2冊の聴講年度は、いつだったのか。「文学概論／芳賀教授」という表題のノートには、末尾の62頁に「千九百十三年五月二十八日講了ル」という書きこみがある。書きこみの日付は、講義最終日であろう。当時の学年歴は9月に始まり、翌年7月に終わっていた。「千九百十三年五月二十八日」が終講日であるということは、この講義が大正元年度（大正元〔1912〕年9月～大正2〔1913〕年7月）に開講されたということであろう。

これらは、西尾実が「文学概論」（芳賀矢一）の講義を、大正元年度に受講したことを示している。大正元年度は西尾実の大学入学一年次に当たる。かくて、芳賀矢一講義「文学概論」は、西尾実の記憶通り、大学入学の年である大正元（1912）年度の聴講であったことが確かめられた。

これに対して、西尾実が想起する芳賀矢一の講義「平安朝文学史」は、大正元年度版『学生便覧』には対応するものがなかった。「平安朝文学史」という西尾実の記憶は、何を物語っているのだろうか。手がかりを求めて、『学生便覧』記載の「講義題目」について、西尾実の在学期間である大正元年度より大正3年度までの分を調べてみた。結果は芳しくなかった。

「平安朝文学史」と題する講義題目は、当該期間中、芳賀矢一の開設講義の中には見つけることができなかった。芳賀矢一以外についても調査したが、この期間中に「平安朝文学史」という講義題目を開設している担当者はいなかった。

西尾実の記憶に生きる「平安朝文学史」は、入学の年の授業である。講義題目はともかく、講義の担当者名は比較的覚えているのではないかと。まして、芳賀矢一は、西尾実が専攻する国文学の教授である。卒業論文の指導教官になる人でもある。芳賀の名前を間違えることは少ないであろう。芳賀矢一の大正元年度の開設科目を検討してみよう。芳賀矢一のそれは、先に掲げたように、つぎの3科目であった。

文学概論 1単位

国文学史（上古及中古） 1単位

平安文学ノ演習（藤村助教授ノ演習
ト併セテ） 1単位

「文学概論」は既に検討済みである。残る2科目について掲載順に見ていこう。『西尾文庫蔵書目録』（長野県下伊那教育会西尾実研究委員会編集・発行 昭和59年2月15日刊）には、「十. 東大学生時代筆記ノート」の項がある。本項の下、「東大学生時代筆記ノート」合計70冊が「ノート」名、「講座教授等」名の順に掲載されている。そこに、「国文学史」（1冊）と「国文学史 平安朝」（1冊）と題するノート名がある。また、「国文学史」の「講義教授等」欄には「芳賀教授」の名前が記載されている。一方、「国文学史 平安朝」の「講義教授等」欄には、「久松氏筆記写」と記入されている。

「国文学史」と「国文学史 平安朝」というノートの現物は、『西尾文庫』に所蔵されている。各ノートは、実際、どのようなになっているのか。各ノートについて調べてみた。その結果、「東大学生時代筆記ノート」（『西尾文庫蔵書目録』）記載の「国文学史」と「国文学史 平安朝」という名称は、各ノートの表紙に記述された題名によったものであることが分かった。しかも、それらは略述であった。正確な記述は、こうである。一つは、横書き二段書きにて、上段に「国文学史」、下段に「芳賀教授」と記されている。今一つは、横書き三段書きにて、上段に「国文学史」、中段に「平安朝」、下段に「芳賀教授」と記述されている。

また、二つのノートには、各々、背表紙に書きこみがあった。表紙に「国文学史／芳賀教授」とあるノートの背表紙には「国文学史Ⅱ 平安朝」と記されていた。本ノートの場合、加えて、見開き1頁の右側の頁に、角書きにて「平安朝」の後、「国文学史 卷二」と、大きな文字で縦書きされていた。

一方、「国文学史／平安朝／芳賀教授」という表紙

をもつノートには、「国文学史Ⅰ 平安朝」という文字が背表紙に附されていた。「東大学生時代筆記ノート」（『西尾文庫蔵書目録』）には、先に掲げたように、「国文学史 平安朝」の「講義教授等」欄は「久松氏筆記写」と記入されていた。本当だろうか。「東大学生時代筆記ノート」をみると、「国学初歩1」「国学初歩2」「国文学史 平安朝」「鎌倉室町時代小説史1」の計4冊が「久松氏筆記写」となっている。これら4冊について、実際にノート現物と照合した。4冊の内、「国学初歩1」と「国学初歩2」の2冊は、確かに、見返しのところに「久松氏筆記写」と明記されている。「鎌倉室町時代小説史1」は未見。そんな中、「国文学史 平安朝」と題する聴講ノートには「久松氏筆記写」の記載はなかった。西尾実には、見返しの特記に認められるように、自筆記と他氏筆記写とを明瞭に区別する意識があった。「国文学史 平安朝」と題する聴講ノートだけに「久松氏筆記写」を書き忘れた、ということは考えにくい。真相はどうであったか。気になるところであるが、更なる判断は保留にして、先に進む。

「国文学史」と「国文学史 平安朝」、という二つの聴講ノートに関する個々の状況は、今述べた通りである。両者の関係は、どうなっているのだろうか。二つは同一科目に関わっているのか。それとも、科目を異にしているのか。どちらであろうか。確かめてみよう。二つの科目について、表紙と背表紙とを並記して掲げる。

<表紙>

国文学史
平安朝
芳賀教授

<背表紙>

国文学史Ⅰ 平安朝

<表紙>

国文学史
芳賀教授

<背表紙>

国文学史Ⅱ 平安朝

二つのノートは、同一科目の可能性が高い。理由は、つぎの通りである。背表紙に注目したい。「Ⅰ」と「Ⅱ」の違いは科目の違いというよりも、ノートの順序を指しているのではないだろうか。そのことを示唆する情報がある。背表紙に「国文学史Ⅱ 平安朝」とある聴講ノートには、先に指摘したように、ノート見開き1頁の右側の頁に「国文学史 卷二」と記されていた。背表紙にあった「国文学史Ⅱ」の「Ⅱ」は消えている。そして、数詞「Ⅱ」の代わりに、「卷二」ということばが用いられている。

「Ⅰ」と「Ⅱ」は、「卷一」と「卷二」に対応する。そのように推量できるのではないかとすると、二つの聴講ノート、即ち、「国文学史」と「国文学史 平

安朝」の関係は、つぎのようになろう。これら二冊のノートは、「国文学史」という同一の講義科目を対象にしていたのではないか。順序は、講義科目「国文学史」の「巻一」に当たる聴講ノート「国文学史 平安朝」が先で、その後に「国文学史 巻二」という記載をもつ聴講ノート「国文学史」が来るのではないか。言いかえると、「国文学史 平安朝」と「国文学史」という二冊の聴講ノートによって、一つの科目名である「国文学史」の講義をカバーしていたのではないかと。

このことは、ノートの内容面からも認められる。講義科目「国文学史」の「巻一」に相当するのが、ノート「国文学史 平安朝」であった。本ノートより、章題に比すことができる見出し文を列挙する。見出し文は「平安朝／仏教思想輸入」に始まり、「平安朝ニ於ケル漢詩文」を経て、「我国ニ於ケル和歌ノ起原（ママ）及沿革」に至っている。他方、講義科目「国文学史」の「巻二」に比定するノート「国文学史」は、同様に見出し文に着目すると、「落窪物語」に始まり、「源氏物語」を経て、「枕草子」、「歴史物語」、「歌論書」、「平安文学ノ後代ニ及ホセル影響」の順に展開している。二冊の聴講ノートは、内容上、接続関係において矛盾はない。そのことは、また、『学生便覧』記載の「国文学史（上古及中古）」という講義題目の副題「上古及中古」とも、呼応している。

これらから、ノート「国文学史 平安朝」とノート「国文学史」は、表題は異にするものの、「国文学史」という同一の講義科目を対象にしていたと指摘できよう。

では、「国文学史」という講義科目の開設年度は、いつのことだったのだろうか。二冊のノートの内、背表紙に「国文学史Ⅱ 平安朝」という表題をもつノートがあった。本ノートの末尾頁に「千九百十三年五月二十七日講了。」という書きこみがあった。講義終了の日付である。最終講義の年月日が「千九百十三年五月二十七日」ということは、大正元年度（1912年9月～1913年7月）用に開設された科目であることを示している。「国文学史」は大正元年度に開設された科目であったであろう。となると、つぎのように考えられる。「国文学史」という科目は、大正元年度版『学生便覧』記載の「国文学史（上古及中古）1単位」に対応するのではないかと。

これらを踏まえて、西尾実の記憶に立ち返ろう。西尾実の記憶では、芳賀矢一の講義題目は「平安朝文学史」というものであった。だが、この名称と同一の題目名はなかった。あったのは、大正元年度版『学生便覧』に記載の「国文学史（上記及中古）」という講義題目と西尾実の聴講ノート2冊に関わる。聴講ノート

の名称は、「国文学史 平安朝」と「国文学史」であった。2冊のノートは同一の講義科目を対象にしており、2冊1組にて、大正元年度開講の「国文学史」という講義をカバーしていた。「平安朝文学史」とする西尾実の記憶は、聴講ノートの表題に由来するのではないか。聴講ノート2冊の内、1冊の表題は「国文学史 平安朝」であった。表題が示すように、授業は「平安朝」に重点を置く講義内容であった。その理解の上に、講義題目の違いが生じたのであろう。西尾実は、講義内容の実際に立って、「国文学史 平安朝」を「平安朝文学史」の形で記憶化したのではないか。講義題目には違いはあるが、大学入学の年である大正元年度に、西尾実が芳賀矢一の講義「国文学史」を聴講していたことは確かであろう。

西尾実は、大正元年度に、芳賀矢一の「文学概論」と「国文学史」の2科目を履修していた。西尾実の記憶とも、ほぼ一致していた。

3. 「年譜」の検証 (II)

芳賀矢一の場合、『学生便覧』によると、大正元年度の開設科目は3科目であった。「文学概論」と「国文学史」との2科目以外に、「平安文学ノ演習（藤村助教授ノ演習ト併セテ1単位）」という講義科目を開設していた。先に掲げたことであるが、西尾実は大正元年度の聴講科目として「講義」のほかに、「演習」の授業もあったと回想していた。演習科目の一つとして、芳賀矢一の「平安文学ノ演習」は、履修しなかったのだろうか。その演習名は、西尾実の記憶の中にはなかった。果たして、実際はどうだったのだろうか。確かめてみよう。

ここに、「文学演習（平安時代）（江戸時代）」と題する西尾実の聴講ノートがある。ただし、「東大学生時代筆記ノート」（『西尾文庫蔵書目録』）には、「文芸演習」と記載されている。だが、聴講ノートはそうではなくて、確かに「文学演習」となっている。両者間には、「文学」と「文芸」、表記上の違いがある。精査は、今後の課題にしたい。ここでは、聴講ノート記載の「文学演習」という表現に従って進めていく。

「文学演習（平安時代）（江戸時代）」と題する聴講ノートについて、「東大学生時代筆記ノート」の「講義教授等」欄は空白になっており、授業担当者名は不明扱いになっている。授業者は、誰なのか。また、授業の開設年度はいつなのか。いずれも、分かっていない。つぎは、これらについて検討していこう。

聴講ノート「文学演習（平安時代）（江戸時代）」は、表題より「平安時代」の部と「江戸時代」の部、二つ

から成るのではないかと推量できる。二部仕立てである。実際は、どうなっているだろうか。調べてみよう。ノートの見開き1頁に「平安文学の演習」という見出し文がある。同時に、ノート中程の見開き26頁には「徳川文学の演習」という見出し文がついている。「文学演習（平安時代）（江戸時代）」のように、聴講ノートの表題は「江戸時代」であり、「徳川文学」という見出し文とは異なるが、指示対象に大きな違いはない。表題に合わせた見出し文の構成であるといえる。

内容面はというと、つぎのようであった。「平安文学の演習」の見出し文のもと、「竹取物語／芳賀教授講演。」（見開き2頁）、「伊勢物語／芳賀教授」（見開き5頁）、「大和物語」（見開き18頁）、「落窪物語」（見開き22頁）の順に展開している。一方、見開き26頁より始まる「徳川文学の演習」という見出し文は、2頁おいて、西鶴に関する記述が開始されている。27頁から28頁、この間2頁には「故藤岡博士第（2字分読字不明—引用者注）忌記念講／演会ニ於ル藤村助教授ノ講演。／元禄文学の特質。」と題する記述が挿入されている。「故藤岡博士」とは、言うまでもない。「藤岡作太郎」のことである⁶⁾。

藤岡作太郎 ふじおか／さくたろう

明治三・九・一九—四三・二・三（一八七〇—一九一〇）国文学者。東圃と号す。加賀の金沢に生まれ、四高を経て、明治二七年東大国文科を卒業、三〇年三高教授になり、ついで三三年九月に東大助教授に任ぜられ、没するまでその職にあった。明敏な頭脳と鋭い芸術理解力をもって国文学および絵画の研究に卓越した成果をあげた。文学史研究に力を注ぎ、芳賀矢一とともに近代の国文学の樹立の上に大いなる寄与をなした。

「文学演習（平安時代）（江戸時代）」と題する聴講ノートは前半が「平安文学の演習」、後半が「徳川文学の演習」のように、内容面も表題に対応していた。本ノートは、推量の通り、二部仕立てになっていた。内容を異にする二つの授業が1冊のノートに収載されていたのである。

では、授業者は誰だったのか。「平安文学の演習」の見出し文の部には、先に掲げたように「竹取物語／芳賀教授講演。」（見開き2頁）、「伊勢物語／芳賀教授」（見開き5頁）と、「芳賀教授」という名前が書きこまれていた。「芳賀教授」とは、時代状況から見て、芳賀矢一のことであろう。

芳賀矢一に関しては、また、つぎのような記述がある。聴講ノート「文学演習（平安時代）（江戸時代）」の見開き25頁、つまり、「平安文学の演習」という部の末尾頁であるが、そこに「試験論文」という項がある。「試験論文」のもと、「竹取物語ト今昔物語中ノ竹

取伝説トノ比較（六月二十五日迄ニ芳賀先生宅へ郵送スル事）」と記されている。これらの書きこみは、「平安文学の演習」の授業担当者が芳賀矢一だったことを示していよう。

とすると、「平安文学の演習」という芳賀矢一の授業は、いつ開設されたのだろうか。「徳川文学の演習」という見出し文に続くノートの後半部に、「21. 4. 1913」、「1913. 2. 15」などの数字がある。数字は、年月日であろう。「1913」は1913年を、「21. 4」は「4月21日」を、「2. 15」は「2月15日」を指していよう。当時の学年歴は9月開始、翌年7月終了だった。「1913」年の「2月」「4月」は、1912年度（1912年9月～1913年7月）に当たる。つまり、「徳川文学の演習」の授業は、1912（大正元）年度に開設されたことになる。ということは、同一ノート中の前半部、つまり「芳賀先生」担当の演習も、同様に、1912（大正元）年度に開設された可能性が高くなる。

ノート前半部の「平安文学の演習」は、芳賀矢一が授業担当者であった。先に提示したように、大正元年度版『学生便覧』の「講義題目」欄には「平安文学ノ演習（藤村助教授ノ演習ト併セテ1単位）」とする記載があった。これに関して、少し前に戻ることになるが、つぎのことを想起しよう。「徳川文学の演習」という見出しの章に「藤村助教授」の名前があったことを。「徳川文学の演習」の開設年度は大正元年度であったことを。その上で、つぎの記述に注視したい。大正元年度版『学生便覧』の「講義題目」欄には、「藤村 作助教授」という名において、こう記載されていた。

藤村 作助教授（文学科国文学）

徳川文学演習（芳賀教授ノ平安文学演習ト併セテ1単位）

これらのことより、聴講ノート「文学演習（平安時代）（江戸時代）」は、大正元年度版『学生便覧』の「講義題目」欄にある芳賀矢一「平安文学ノ演習」と藤村 作「徳川文学演習」、両者の「演習」を収めたノートであったと言えよう。西尾実は大学入学の年、大正元年度に芳賀矢一の授業を3科目聴講したことになる。芳賀矢一の授業の履修が一つ増える。西尾実の記憶には、なかった科目である。藤村 作担当分の「徳川文学演習」も、また、西尾実の記憶の中にはなかった。西尾実の記憶になかった科目が二つ出てきた。西尾実の記憶に、疑問符がつくことになる。

つぎに、西尾実が想起する大正元年度の履修科目5科目の内、藤村 作に関わる科目を検討しよう。西尾実の記憶では、「元禄期の文学」と「読本の研究」の2科目が挙がっていた。確かであろうか。

最初に、大正元（1912）年度版の『学生便覧』を

みてみよう。「藤村 作」の担当する科目を見る限り、「元禄期の文学」と「読本の研究」という題目は、二つながら認めることができなかった。つぎに、「東大学生時代筆記ノート」(『西尾文庫蔵書目録』)をみてみよう。そこには、つぎの五つのノート名と冊数が挙げられている。

- ・「近世文章史」(3冊)
- ・「近世小説史」(2冊)
- ・「最近小説史」(1冊)
- ・「小説史」(1冊)
- ・「元禄時代の国文学」(3冊)

聴講ノートとの照合作業が不可欠である。だが、聴講ノートの現物は未調査である。今後の課題としたい。

西尾実は、繰り返すが、大正元年度の履修科目を回顧する文章の中で「ほかに、八杉講師の『十九世紀のロシア』という講義を聴講しました」と述べていた。実際は、どうだったのだろうか。つぎに、この点を検討しよう。

『学生便覧』の大正元(1912)年度版には、これまた、先に見たように「八杉貞利講師」については、つぎの二つの講義題目と単位数が示されていた。

露西亜語学初歩 1単位

露語文学書購読 1単位

西尾実の記憶する題目「十九世紀のロシア」とは異なる。そこで、関係資料に当たってみた。「東大学生時代筆記ノート」(『西尾文庫蔵書目録』)には、「八杉貞利」に係わるノートとして、つぎの1冊が挙げられている。1冊のノート名は「文学作品に(ママ)アラハレタル十九世紀の(ママ)露西亜」であり、「講義教授等」欄の記載は「八杉講師」であった。ここには「文学作品に(ママ)アラハレタル十九世紀の(ママ)露西亜」とある。西尾実の記憶は冠部を除いた末尾だけの「十九世紀のロシア」であった。とまれ、「十九世紀の露西亜」(「東大学生時代筆記ノート」)という箇所は、「ロシア」と「露西亜」のように、片仮名と漢字の表記上の違いはあるものの、西尾実の記憶に通じている。「文学作品に(ママ)アラハレタル十九世紀の(ママ)露西亜」とするノート名は、反面、大正元年度版『学生便覧』記載の「露西亜語学初歩」や「露語文学書購読」という講義題目とは、かなりの距離がある。

このような作業のもと、ノートの調査に入った。ノートの表紙には、「文学作品ノ上ニアラハレタル十九世紀ノ露西亜／八杉講師」のように、講義題目が墨書にて縦書き2段に書かれていた。「東大学生時代筆記ノート」のノート名とよく似た題名である。近似はしているが、正確には違う。現物のノートには「文学作品ノ上ニ」の「ノ上」の二文字がついている。だが、「東大学生時代筆記ノート」のノート名には、「ノ上」

の二文字がない。事態を欠落ととらえると、「東大学生時代筆記ノート」の記載は写し間違いとなるのか。

さて、「文学作品ノ上ニアラハレタル十九世紀ノ露西亜」というノートの聴講年度は、いつだったのだろうか。ノートの中には、調べ得た限り、日付に係わる記述は見出せなかった。しかしながら、ここに一つの手がかりがある。『学生便覧』(東京帝国大学文科大学)である。と言っても、急いで付け加えるが、大正元年度版ではない。大正元年度版にはそのような記述はなかった。注目したのは、西尾実在学中の期間である。在学期間中における八杉貞利の担当科目を調べてみた。すると、「文学作品ノ上ニアラハレタル十九世紀ノ露西亜」(「単位」欄は空白)という講義題目に出会った。聴講ノートの題名と完全に一致する。「完全に」とは、表記の一字まで一致しているという意味である。開設年度はいつかという点、大正2(1913)年度であった。「文学作品ノ上ニアラハレタル十九世紀ノ露西亜」という講義題目は、西尾実の在学中、大正2年度しか用いられていない。状況証拠の上では、大正2年度の可能性が限りなく高い。少なくとも、大正元年度という西尾実の記憶とは異なる。西尾実の記憶に、また一つ疑問符が加わる。

このように、西尾実の記憶する講義題目と同じものが、確かにあった。ただし、開設年度は異なっていた。このことは、何を物語っているだろうか。というのも、八杉講義の記憶は鮮明であったからである。西尾実は、八杉講義について、つぎのように回顧していた⁽⁷⁾。

このときは(大学入学第一年度一引用者注)たしか六単位と定め、ほかに、八杉講師の「十九世紀のロシア」という講義を聴講しました。この講義は時間の関係上、単位にはならないけれども、聞くことにしましたが、聴講者はわたしのほかに、外語のロシア語科出身の大森鉦造氏とフランス文学科の新城和一氏のふたりだけでありましたから、講義の前後に文学についての考えなどを話し合い、ロシア文学におけるインテリゲンチヤ運動などもよく話題になったことを記憶しています。

西尾実は、「この講義は時間の関係上、単位にはならない」と述べている。先に掲げたように、「文学作品ノ上ニアラハレタル十九世紀ノ露西亜」という講義題目の「単位」欄は空白になっていた。西尾実の回想と一致している。「単位にはならないけれども、聞くことにしました」には、また、八杉講義に対する受講意志の強さを見て取ることができる。さらに、「聴講者はわたしのほかに、外語のロシア語科出身の大森鉦造氏とフランス文学科の新城和一氏のふたりだけでありましたから、講義の前後に文学についての考えなどを話し合い、ロシア文学におけるインテリゲンチヤ運

動などもよく話題になったことを記憶しています。」には、当事者にしか知り得ない情報が語られている。八杉講義の記憶は頗る鮮明である。八杉講義が大学入学第1年度の受講科目の一つだった、しかも、それはきわめて印象深いものであったことが強調されている。けれども、既に指摘したように、実際の受講年度は大学2年次（大正2年度）であり、西尾実の記憶違いであった。

ここまで、大学入学一年目（大正元年度）の聴講科目について、西尾実の回想に添って検討してきた。西尾実は、回想において、大正元年度の聴講科目は5科目であったと述べていた。その内、芳賀矢一の「文学概論」と「国文学史」の2科目は、西尾実の記憶とほぼ一致していた。しかし、「文学作品ノ上ニアラハレタル十九世紀ノ露西亜」という講義題目は、大正元年度開設という西尾実の記憶とは異なっていた。加えて、西尾実の記憶になかった授業科目も二つ出てきた。芳賀矢一「平安文学ノ演習」と藤村 作「徳川文学演習」である。西尾実の記憶に、疑問符がつく結果となった。反面、記憶の検証を経て浮かび上がってきたことがある。八杉貞利講義に関わる。西尾実の回想は、公表前提の上での作業であった。そこに八杉講義が入っているのである。実際の聴講年度とは異なる。単なる記憶違いであろうか。それとも、そのように記憶したい西尾実がいるのであろうか。事情は定かでない。確かなことは、八杉講義が大正元年度聴講科目として回想の前面に押し出されていることである。精査は今後の課題としたい。

4. 「年譜」の検証（Ⅲ）

ここで、今一度、先行研究に立ち返ろう。冒頭に掲げたように、「西尾実年譜」には、大学入学一年目の聴講科目について「芳賀矢一・藤村 作・垣内松三などの講義を聴講した」というものの、講義に係わる言及はこれ以上にはなかった。また、「芳賀矢一・藤村 作・垣内松三などの講義」題目名も明記されていなかった。「芳賀矢一・藤村 作」についてはこれまで見てきた通りである。つぎは、垣内松三の講義について検討しよう。

最初に、垣内松三の講義に関わる西尾実の記憶について見てみよう⁽⁸⁾。

わたくしは、大正元年九月から大正四年七月まで、東大の国文科で、垣内松三先生の「武家故実」と「国文学研究法」の講義を伺った。当時、垣内先生は東京女子高等師範学校講師として東大講師を兼ね、東大では、有職故実学の講義を委託

されていたようであつた。（略）

わたくしが、大正元年と二年の二ヶ年にわたつて聴講した「武家故実」も、考えてみると、後年の書である、この「石叫ばん」の思想を生み出すための、先生の探求過程でもあつたかと思ひあわせられる。（略）わたくしの「武家故実」聴講は大正三年までであり、その後、大正八年までのあいだに、国民生活史をも講じられているらしいが、それは、著書にも論文にもならなかつたので、以上は、大正八年渡欧を前にして書かれた「石叫ばん」を、大正二・三年の聴講と結びつけて考えたわたしの想定である。（略）垣内先生が大正三年九月から大正四年七月にわたつて講義された「国文学研究法」は、イギリス、フランス、ドイツなどにおける文学研究法を紹介されながら、日本文学の研究に関する方法体系を樹立されようと試みられたものの一部分であつたと記憶する。

ここには、「大正元年と二年の二ヶ年にわたつて」「武家故実」という講義を聴講したこと、「大正三年九月から大正四年七月にわたつて講義された『国文学研究法』」を聴講したことの二つが、想起されている。西尾実は、また、つぎのようにも回想している⁽⁹⁾。

大正二年の九月、覚悟をあらたにして聴講を続けた。最初の学年の経験から、聴講の範囲を広げ、哲学科の大塚保治教授の美学松本亦太郎教授の心理学のほかに、姉崎正治教授の「中世のキリスト教」、村上専精講師の日本仏教史のほか、文学科でも八杉貞利講師の「十九世紀のロシア」その他を聴講した。国文科の中でも垣内松三講師の「武家故実」翌年の「国文学研究法」などは、休みの多い講義であり、難解な講義であつたけれども、暗示的な独創的な魅力をもって一部の学生を引き付けた。わたしも熱心に出席したひとりである。

「覚悟をあらたにして」とは、先に触れたように、中退事件後の応接を指している。ここには、「国文科の中でも垣内松三講師の『武家故実』翌年の『国文学研究法』などは」とある。つまり、大正2年度に「武家故実」を、「翌年」（大正3年度）に「国文学研究法」を聴講したという。ここでは垣内松三の講義の聴講は、中退事件以後のこととして扱われている。受講年度も、大正2年度以降としている。

先の記憶と比べてみよう。「国文学研究法」の聴講は、大正3年度で一致している。記憶にズレはない。反面、「武家故実」の聴講には記憶に幅がある。大正元年度と同2年度の2ヶ年とするものと、中退事件以後の大正2年度1回とするものがある。

記憶を踏まえて、つぎに『学生便覧』を見てみよう。西尾実の大学在学期間は、大正元年度より大正3年度

であった。この間について、『学生便覧』に記載されている垣内松三の「講義題目」名を調べた。結果は、つぎの通りであった。

＜大正元年度＞

- ・有職故実（武家故実）
- ・年中行事の研究

「単位数」は「有職故実（武家故実）」と「年中行事の研究」、二つ併せて「1 単位」。

＜大正 2 年度＞

- ・武家故実
- ・調度ノ研究

「単位数」は「武家故実」と「調度ノ研究」、二つ併せて「1 単位」。

＜大正 3 年度＞

- ・武家故実
- ・調度ノ研究

「単位数」は「武家故実」と「調度ノ研究」、二つ併せて「1 単位」。

西尾実の記憶と照合してみよう。「国文学研究法」の聴講は、記憶では大正 3 年度で一致していた。しかしながら、大正 3 年度版『学生便覧』にはその講義題目名はなかった。一方、「武家故実」という講義題目は、在学中の 3 年間、『学生便覧』の「講義題目」欄に毎年度掲載されている。聴講年度において西尾実の記憶には幅があったが、『学生便覧』の記述に概ね収まる。このように、結果は記憶と一致する科目とそうでないものに分かれた。

「国文学研究法」は、一致しなかった科目である。そうではあるけれども、反面において「垣内先生が大正三年九月から大正四年七月にわたって講義された『国文学研究法』は、イギリス、フランス、ドイツなどにおける文学研究法を紹介されながら、日本文学の研究に関する方法体系を樹立されようと試みられたものの一部分であったと記憶する。」のように、西尾実の記憶は鮮明であった。その意味では、西尾実の聴講は確かであろう。問題は、聴講の時期である。時期が違うのではないか。そこで、今一度『学生便覧』を調べた。すると、同じ講義題目名があるではないか。ただし、繰り返すが、大正 3 年度ではない。大正 4 年度と同 5 年度である。つぎに、当該年度を含めて、大正 6 年度までの分を掲げる。

＜大正 4 年度＞

- ・日本文学ノ背景 「単位数 1」
- ・国文学研究法 「単位数」欄は空白

「備考」欄に「第一第二学年生ノタメニ（本学年開講二学年継続）」とある。

＜大正 5 年度＞

- ・有職故実 「単位数 1」

・国文学研究法 「単位」欄は空白
「備考」欄に「前学年ト合シテ 1 単位」とある。
＜大正 6 年度＞

- ・近世国民生活ノ二様式 「単位数 半」
「備考」欄に「日常生活ト合セテ 1 単位トス」とある。
- ・日記及ヒ随筆ニ現ハレタル日常生活 「単位数 半」

このように、「国文学研究法」という講義題目は、『学生便覧』では大正 4 年度が初登場である。このことは「第一第二学年生ノタメニ（本学年開講二学年継続）」の「本学年開講二学年継続」からも伺える。それはまた、大正 5 年度版の「前学年ト合シテ 1 単位」により、一層確かさを増している。

果たして、『学生便覧』通りだったのだろうか。ノート現物に当たってみよう。「東大学生時代筆記ノート」を見ると、垣内松三の名前は、つぎの 3 箇所に出ている。

ノート名	講義教授等
国文学研究法	垣内講師
武家故実 1	垣内講師
武家故実 2	垣内講師

「西尾文庫」（下伊那教育会）には、垣内松三については、つぎのノート 3 冊が遺されている。表紙の題目名を掲げると、つぎの通り。

国文学／研究法／垣内講師
武家故実／垣内講師／I
武家故実／垣内講師／II

「国文学／研究法／垣内講師」という表紙をもつノートの聴講年度は、いつだろうか。調べ得た範囲では、ノート内に受講日の記載はなかった。代わりに、つぎのような記述に出会った。場所は「日本文学（国文学）」について明治以降の展開に関わるころ、本ノートの見開き 9 頁である。

明治十八年	国学トハ何ゾヤノ問題
明治二十三年	復ビ起ル
雑誌	{ “東洋学芸誌林” “国文学”
芳賀	
藤岡	国学史
明治三十八年	国文学入門
同三十九年	〃 〃
同四十三年	日本文学（古賀博士）
大正四年	上田博士〇〇（2 字分読字不明一引用者注）

記述末尾に「大正四年」とある。ということは、本ノート記述の時点は、「大正四年」以降となろう。

記述は、ノート全体見開き72頁の内、前から9頁にあることから、講義開始後間もない頃と思われる。講義開始後間もない頃となれば、該当年度は大正4年度になろうか。大正4年度とすると、『学生便覧』の記載と呼応する関係にあり、「国文学研究法」の聴講年度は大正4年度の可能性が高まる。

西尾実の東京帝国大学入学は大正元年10月であり、卒業は大正4年7月であった。しかし、卒業後も、大正7年8月に松本女子師範学校へ赴任するまで大学の講義の聴講を続けた⁽¹⁰⁾。西尾実が東大の講義を聴講できたのは、大正元年10月から大正7年8月までの期間であった。この時期の学年暦は、先にも述べたように、9月に始まり7月に終わる。学年暦を考慮すると、西尾実の聴講の時期は大正元年度（大正元年9月～大正2年7月）より大正6年度（大正6年9月～大正7年7月）にかけてということになる。大正4年度の聴講は、十分に可能であった。

一方、「武家故実」に関する聴講ノートは2冊遺されている。ノートの表紙は、それぞれ、つぎのように書かれている。一つは「武家故実／垣内講師／I」のように、上段に「武家故実」、中段に「垣内講師」、下段に「I」と墨書にて記されている。今一つも、同じ形式にて、「武家故実／垣内講師／II」と3段に分かち書きされている。講義題目は、ともに「武家故実」である。「I」「II」は、何を意味しているのだろうか。内容を精査してみよう。「武家故実／垣内講師／I」は「関東ノ中心ガ鎌倉トナリシ時ガ即武家故実研究問題ノ起ル所也。又茲ニ於ケル日常生活ガ元トナリテ発展シタルモノナリ。コレヲ人文地理学上ヨリ見テノ鎌倉ノ土地ニ武家ノ中心ガ生ジル迄トコレヲ生ジタル後トニ如何ナル関係存スルカ。」と書き出され、以降、地名論、「武家ノ発達」、「文化」の各章を経て、「宗教」の章へと進み、最後の頁は「足利尊氏が天龍寺ヲ建ツル中費用ニ窮シ支那ト貿易シ其利益ヲ以テ建ントスル為船ヲ支那ニツカハセシモノニシテ其船ノ」と、文章の途中で終わっている。これに対して、「武家故実／垣内講師／II」は、冒頭が「到ル時京都五山ノ僧ガ度々コレニ乗ジテ支那ニ渡レリ。」となっている。則ち、「II」は「I」を受ける関係にあった。「I」と「II」は、接続する関係にあった。二つのノートは「武家故実」という同一の講義を対象としており、数字はノート記載の順序を示していたのである。だが、聴講年度の確定までには至らなかった。というのも、ノートのどこにも、受講日に係わる記述がなかったからである。

以上、大正元年度受講科目を確定する作業を試みてきた。通説の修正が不可欠の結果となった。それに伴って、「中途退学」との関係も、通説とは異なる先

行きとなってきた。つぎは、この点を明らかにしていきたい。

(この項、続く)

(注)

- (1) 杉 哲「西尾実と道元」『熊本大学教育学部紀要』第49号 人文科学 2000年12月15日
- (2) 西尾実『教室の人となって』国土社 昭和46年2月5日 39頁
- (3) 西尾光一「西尾実年譜」『西尾実国語教育全集』第10巻 教育出版 昭和51年6月 507～508頁
- (4) 杉 哲「西尾実と姉崎正治」『解釈』平成13年5・6月号
- (5) 注2 44～45頁
- (6) 『増補改訂 新潮日本文学辞典』新潮社 1988年1月20日 久松潜一稿
- (7) 注5に同じ。
- (8) 西尾実「その頃の垣内先生」『国語と国文学』第343号 昭和27年11月1日 48～50頁
- (9) 西尾実「巢に帰る(一)」『実践国語』昭和40年5月5頁
- (10) 注3 508～509頁

(付記)

- ・引用文献の漢字表記については、新字体に改めた。
- ・引用文献の発行年は、その文献の奥付に従った。年号あるいは西暦のどちらかに一定していない。